

吉林大学国際シンポジウム～モンゴルを巡る北東アジア地域協力と発展

ERINA理事長兼所長 吉田進

9月27日、中国・長春にて「第12回北東アジア地域協力と発展国際シンポジウム」が、吉林大学東北アジア研究院と鳥取大学の共催で開かれた。今回のテーマはモンゴルの対外経済関係と北東アジアとの協力であった。

シンポジウムには海外の研究者41名を含む90名が出席した。モンゴルからは科学アカデミー国際問題研究所、モンゴル国立大学、商学院、国立農業大学、ロシアからは科学アカデミー世界経済・国際関係研究所、極東経済研究所、韓国からは国家安全保障戦略研究所、江原道発展研究院、韓国東北アジア学会、鮮文大学、任荷大学、大邱大学、順天郷大学、韓南大学、忠南大学、日本からは鳥取大学、東京財団、ERINAが参加した。

中国の出席者は、社会科学院、吉林大学、北京大学、黒龍江省社会科学院、内モンゴル大学、延辺大学、現代国際関係研究院、戦略研究所、アジア太平洋研究所、人民大学、洛陽外国語学院、内モンゴル東北アジア研究所からである。

開会挨拶の中で、李玉林吉林大学副学長は、今回のシンポジウムでモンゴルを取り上げた理由として、モンゴルは北東アジアの重要な構成国であること、ここ数年モンゴルが経済発展で大きな成果を収めたこと、吉林大学は1966年からモンゴルの留学生を受け入れ、最近その数が増えていること、東北アジア研究院でモンゴル研究を強化する風潮が高まったことを挙げた。

基調報告では、李玉潭吉林大学東北アジア研究院長が、モンゴルの経済発展と中国・モンゴル経済貿易協力について講演を行った。

モンゴル科学アカデミー国際問題研究所のチムール教授は、モンゴルの北東アジア地域協力と題して、モンゴル全般に触れた。

分科会は、モンゴルの経済発展と展望、モンゴルの対外経済貿易協力、北東アジア地域協力とモンゴル、の3つに分かれて行われた。これらの分科会では、モンゴルの歴史的変化、経済改革の経緯と問題点、モンゴルの貿易史、貿易の特長、貿易と経済関係を取り巻く環境の変化とその活用、北東アジアにおけるモンゴルの位置づけと役割などが報告された。さらにそれを補足するものとして、人

口問題、労働力問題、医療問題、観光業の現状と展望、畜産業の特徴、野生動物の紹介など、多岐に渡る紹介があった。

ロシアと中国の報告を聞くと、それぞれの国とモンゴルとの関係が大きく変化していることがわかる。ソ連崩壊、コメコンの解体によって、モンゴルはこの機構から放り出され、ソ連の援助は止まった。また、ロシアの市場経済への移行と並行してモンゴルの経済改革が行われ、両国ともインフレの混乱に巻き込まれ、相互貿易は最悪の事態を迎えた。それが回復し始めたのは2000年に入ってからである。

一方、中国はモンゴル族の自治性を高めるため、東北三省の一部を内モンゴル自治区に編入し、モンゴルとの近隣性を利用し、貿易・投資活動を進めてきた。最近では、石炭の共同開発、高層建築物の建設、カシミア原毛・銅精鉱・亜鉛などの輸入を活発化させ、貿易高は1999年にロシアを追い越した。2006年の中国のモンゴルとの取引は15.8億ドルである。ロシアのモンゴルへの輸出は5.47億ドルであり、石油製品の全部と電力の一部を供給している。

人口問題では、日本や中国で人口減少が起こる中で、モンゴルだけは増加傾向が2050年まで続くと言われている。

今回の会議の特長は、北東アジア研究では先端基地であると中国教育部に評価されている吉林大学において、初めてモンゴル問題が取り上げられたことにある。その狙いは、モンゴル学の基礎作りであり、背景には資源国モンゴルの再評価がある。政治、社会、経済、人口、生物学などあらゆる角度からモンゴル問題が論じられた。

モンゴルに関心のある北東アジアの専門家が一堂に集まったこと、また、どの国の誰が、何をテーマに研究しているかが明らかになったことは、大きな成果であった。

しかし、時間の関係から(1人に与えられた時間は10分)、主旨説明と問題提起だけに終わり、掘り下げた論議ができなかったことは残念であった。

なお、この会議で私は「図們江地域開発と中モ鉄道の建設」という報告を行った。